

他漢詩三首 : 文苑

著者	笠間, 梧園, 淺川, 雄太郎
雑誌名	龍南會雜誌
巻	18
ページ	51-51
発行年	1893-06-27
URL	http://hdl.handle.net/2298/4098

靈泉引客是瓦煤。旅館連檐倚水隈。幾道瀾
谿雲裡去。一村經濟地中來。除思詩外閑無
事。已畢浴。又時喚杯。寄跡山林知幾日。官情
世味冷將灰。

又曰 任意抒寫逸情橫生第四句特絕

五月廿五日與硯友會諸子會於吉

田君寓居席上作 笠間園梧

笑我塵關未了緣。乘閑一日聳詩肩。人言富
貴已無地。自喜吟歌別有天。當戶殘花紅委
雨。繞園新樹綠如烟。世間万事空經過。欲把
風流樂暮年。

山田雲帆云 前聯自安之意隱然見于筆墨之間

吊亡友山本生 硯友會員 淺川雄太郎

中夕懷君泣不眠。蒼天何意似情偏。看花亦
有濺。花淚對月猶無觀。月緣松籟空聞龍岳
麓。水聲遙咽白川邊。孤心半夜蕭々雨。魂徹

幽冥到九泉

梧園先生云 悲哀情備至

柳 全 全

枝寫細腰葉畫眉。長々短々綠如糸。柔情自
在無言裏。徐弄春風招燕兒。

尼法師 (承前) 晚霞仙

春雨の 降をばなどて怨むらん

老い果てぬれば人も亦 嵐の花と諸共に

散なんものを假の世の 墓なきとを悟りつゝモ

藻盤の烟石左 風のまに／＼迷ふごと

只かりそめの慾に靡き 長からぬ世に道をしも

徳を破りつゝあぢきなき 浮世の罪を作ること

實にや悲しきうぎりなき

かくやど獨り觀すれば 富貴もたゞに風を待つ

燈火に／＼も異ならず 双びが岡の木下蔭

浮世の塵を迷ひ出で 朽ち果てぬ名を後の世に